

帝都地下迷宮

中山七里

第四回

3

終業後、山形に呼び出された小日向はこつぴどく叱責された。同じ逆らうにしても他の同僚や市民の前だったので、尚更逆鱗げきりんに触れたらしい。

「公務員の心得」

「チームワーク」

「個人の正義より公共の利益」

お馴染みの標語めいた警句を並べ立てられたが、右の耳から左の耳に抜けるばかりで胸に残る言葉は一つとしてない。途中から予想通り処分を匂わせる発言をされたので、半ば自棄やけになっていた小日向は捨て鉢すぼちに言い捨てた。

「でも、さっきの様子、誰かがネットに動画投稿していたら、結構閲覧数上がるでしょうね」

ネット投稿と聞いた瞬間、山形の顔色が変わった。

「待ちなさい、小日向くん。ひよっとしてさっきのことを外部に洩らすつもりなのか」

まさか本気にするとは思わなかったが、二重に心に引っ掛かった。

内部からの告発をそんなに怖れているのかという意外さと、自分が内部の事情を安易に投稿する人間と思われていること。いずれにしても生活支援課および山形への不信感を募らせるには充分な台詞せりふだった。

「そんなことしませんよ」

小日向は愛想笑いを浮かべて答える。

「ああいうのは、組織に不信感や幻滅を抱いた人間のやることですから」

山形は当惑した様子で小日向を凝視ぎやうしすると、何も告げずに背を向けてしまった。後ろ姿を見ると、今回もお小言で済みそうな雰囲気だ。

思いのほかあっさり終わったので、小日向は貸与たいよされたパソコンを立ち上げる。(エクスプローラー)たちについて調べておきたいことがあったのだ。

区役所を出ると、すぐに香澄にLINEで連絡を入れた。

『そっちに行きたい。ドアを開けてくれ』

しばらくしてから返事がきた。

『今、どこ？』

『もう、神田駅に近い』

『ジャスト二十分後、ボックスの中で待機』

指示された通り一番出口から構内に入り、証明写真ボックスの中で待機する。約束の時間をじりじり待っていると、あるうにか中年男がカーテンを開けて顔を覗かせた。

「何ですか、このボックス、僕が使っているんですけど」

「使っているって、あんた座っているだけで撮影も何もしてないじゃないか。さつきから何十分経ったと思っているんだよ」

「いや、ちゃんと使っているんです」

「あのな、これは公共の設備だ。どこの誰だか知らないが好き勝手にするんじゃないよ」

香織と約束した時間まであと三分、小日向は次第に焦り始める。

このまま中年男と押し問答している間にボックス内の扉が開けば、構内は大騒動になる。

何とか中年男を遠ざけなければ——咄嗟とっさに思いついたのは、普段

なら思いつきもしない作り話だった。

「僕、たった今上司を殴ってきたんです」

「へっ?」

「多分、懲戒免職ちようかいめんしょくになるので退職金は出ないかもしれませんが。だ
けど早くも家賃の支払い日が近づいています。僕は一刻も早く再就
職しなければいけないんです。でないとアパートを追い出されてホ
ームレスの身に」

小日向はいっきかせい一気呵成に喋りまくる。すると中年男はぎよつとした顔
になり、半歩後ずさる。

「お願いします。僕はひ弱な体質なので、とても路上生活には耐え
られないんです」

「わ、分かった分かった。分かったから、そんなに迫ってくるな」
中年男は気味悪そうに言うと、その場から立ち去ってくれた。よ
ほど関わり合いになりたくないらしい。

約束の時間まであと八秒。ボックスを見ている者がいないのを確
認して中に飛び込む。壁に向けてノックを三回。すると外側に壁が
開く。

「早く」

顔を覗かせた香澄に急せきたてられ、小日向は地下空間に身を躍ら
せる。

「危なかった」

扉を閉めると、小日向は溜息交じりに呟いた。ところが、見れば香澄も小さく嘆息たんそくしている。

「こつちだってはらはらしたんだけど」

「今の聞こえてた？」

「壁一枚だからね。それにしても、よくあんな嘘、思いつけるよね。」

何かオレオレ詐欺の常習犯みたい」

「咄嗟の判断だよ」

「咄嗟にあんな嘘が思いつけるなんて、やっぱり詐欺師の才能あり
ありじゃん」

「一応、公務員なんだけど……」

「理由になってない。公務員だって嘔吐きはとことん嘔吐きじゃん」
抗議しようとしたが、最近のニュースでは公務員の不祥事が連日
のように取り沙汰されている。小日向に反論の材料はない。山形の
言動を見れば尚更だった。

それにしても香澄の言葉には陰けんがある。いや、香澄だけでは
ない。
「エクスプローラー」たちは押しなべて小日向を胡散臭うさんくさい目で見て
いる。何人かと話していると、小日向個人というよりも区の職員と
いう職業に対しての不信感のように思える。

「ひょっとして公務員に恨みでもあるのかい」

半ば軽口のつもりで口にしたのだが、前を歩く香澄は意に反して何も返してこない。

この場合の沈黙は肯定を意味している。無造作に投げたつもりの言葉が急所に命中したらしい。

「もうとつくに自覚していたと思ってたけど、案外鈍いのね。ここにいる連中で、お役所勤めが好きなんなんて一人もないよ」

「嫌う理由は何なんだよ。ただ公務員だからって嫌われたんじゃないよに合わないよ」

「あたしたちは真昼間から、こんな穴蔵にいなきやならない。それが楽しいことだと思う？　好きでやってることだとも思う？」

香澄の言葉は俄にわかに尖とがる。

「地下に押し込まれたのはお役所のせい。全部とは言わないけど、責任のほとんどはあいつらにある」

「穏やかじゃないな」

「それでも穏やかに話しているつもりよ」

「よかったら事情を教えてくださいかないかな」

話し掛けられても、香澄はなかなか返事をしようとしなない。

「なあ、香澄ちゃん」

「そうやってき、自分は善意の第三者みたいな口ぶりで話し掛けてこないでよね。結構、繊細な話なんだから」

「僕は〈特別市民〉なんだから」

「〈特別〉って、要は〈一般〉じゃないってこと。何でも自由に見聞
きできると思ったら大間違い」

香澄は意外に依怙地いこじだった。小日向にしてみれば、自分の推理を
確かめたいのは山々だったが、これ以上質問を重ねてもますます口
を閉ざすばかりだろう。いったん小日向は話題を変えることにした。

「けどどさつきは助かった。ありがとう」

「もう、あんなひやひやするのは嫌よ」

「でもさ、入口になっている証明写真ボックスは〈エクスペローラ
ー〉専用じゃない。表向きは公共の設備だ。もし一般人がボックス
を使用していたら、君たちは出入りができなくなるんじゃないのか」
「外部との出入りはケータイで連絡を密に取る。それに一般人が入
っているかどうかは、足元の窓を見ていたら分かるもの」

考えてみれば当然のことだが、〈エクスペローラー〉たちの出入り
はかなり慎重を期しているようだった。

「今度から気をつけるよ」

「でもさ、今日は月曜だよ。明日も仕事あるんでしょ。金曜日の夜
ならまだ分かるけど、そんなにここが気に入ったの」

「思いついたことがあつてさ。〈特別市民〉として僕にもできること
があるんじゃないかと」

「何をしようっていうの」

「生活支援出張相談」

すると、ようやく香澄がこちらを振り返った。

「前回さ、霜月さんから相談を受けた時、僕は大了たアドバイスもできず、彼女と久ジイを失望させちまった。折角、生活保護の担当者だからって期待してくれたのにな。だからリベンジしたい。今度こそ役に立ってみたいんだよ」

香澄はまだ胡散臭げにこちらを見ている。無理もない。昨日の今日で態度を急変させれば、誰でも訝しく思うに決まっている。

さつき職場で上司に反旗を翻ひるがえした——そう打ち明けるのは簡単だったが、実際に話すのには気が引けた。紅林典江の生活保護申請を強引に受理させ、その余勢を買って「エクスプローラー」の生活相談を思いついただけの話だ。後先考えない上に、調子に乗れば暴走する。今日び小学生でも、もう少し自重じちじやうするのではないか。

しばらく懐中電灯で小日向の顔を照らしていた香澄は、半信半疑の体ていだった。

「本気なの？」

「職業上のノウハウを冗談で開示できると思っているのか」

少し口調を強める。すると香澄は渋々ながら納得したように見え
た。

「久ジイに話を通してくれないか。生活保護の申請だけじゃなく、各種申請で困っている人がいればまとめて相談に乗る」

「……分かった」

香澄に誘われ、光源の乏しい線路の上を進んでいく。やがて会見が叶った際、久ジイは半分呆れ顔だった。

「話は分かったがな、小日向くん。もし徑子さんの一件で気に病んでおるのなら、もう忘れてくれて構わん。あんたの力では助けてやれないと言ったのは失言だった」

失言だったと言いながら久ジイは小さく頭を下げる。その様子で小日向の微力さを嘆いたのは、あまり思慮のない言動であったのが分かる。

「気にはしていますが、気に病んでいた訳じゃありません。何とか税金みたいなものです。(特別市民)として存続させてもらうためには、それ相応の働きをするものでしょう」

「税金なあ」

「久ジイ。この人さあ、見掛けよりずっと強情みたいだから、とりあえずやらせてみれば」

いささか投げやりではあるものの、香澄が取り持つように口を差し挟んでくれた。香澄をよほど信用しているのか、久ジイは鷹揚に顔いてみせる。

「わしがとやかく文句を言う筋合いじゃあない。しかしな、小日向くん。役所に提出する書類の書き方が分からずに難儀しておるのは、一人や二人じゃない。加えて全員が全員、物覚えがいいわけでもない。軽々しく請け負って、後悔するようなことになりはせんかね」

「説明なら普段の業務なんで、屁とも思いませんよ」

「鼻息、荒いなあ」

「何にでも勢いって必要でしょう」

「そこで言うんならやってみたらいい。要望のある者は三十分もあれば集められるが、どこに会場を設営するかね」

相談者が落ち着いて話のできる場所ならどこでもいい。第一、構内ならどこでも同じようなものではないか。

「ふむ。まあ、それもそうか。では、いつから開設するかね」

「是非、今から」

どれだけ早く集められるだろうかと危ぶんだが、さすが長老格の指示とあって希望者はまたた瞬く間に集合した。久ジイの寝起きする近くに机と椅子を設え、簡易な相談所を作る。あくまでも久ジイの管理下で行動しろという意味らしいが、小日向には望むところでもある。

ただし小日向にも予想外のことはいくつか重なった。まず一つは相談者の数の多さだ。久ジイは一人や二人ではないと言ったが、蓋を開けてみれば来るわ来るわ、小日向がぎっと数えただけで三十人

以上の（エクスペローラー）が並んだのだ。全住民のおよそ三分の一。自ら言い出したこととはいえ、その多さにほんの少しだけ後悔を覚えた。

予想外だった二つ目は、彼らの申告住所があちこちに散らばっていることだ。都内はもちろん千葉や埼玉といった首都圏、それ以外に滋賀県ながはま長浜市・高島市たかしまに住所を持つ者もいた。

こと生活保護申請に関する限り、小日向は専門家だ。省や役所の思惑はともかく、どこの自治体が申請に厳しいのか、またどう申請書を書けば受理されやすいのかくらいは把握している。各々の住所おのおのを管轄する役所が多少ばらけていても、対応に困ることはない。

「資産の中に売却不能の山林があれば、不動産としての価値はほとんどありません。評価額を示す書類を添付すれば、収入源とは見做みなされません」

「母子家庭の方は、お子さんの人数分だけ最低生活費が加算されます」

「まず自分の住所地を管轄している自治体が定める最低生活費を把握することから始めてください。たとえ病気でなくても、あるいは就労中であっても、所得が最低生活費を上回らないのなら生活保護費を受給できる可能性があります。決して諦めないでください」

生活保護は社会福祉の主要政策の一つでありながら、自分だけは

生活保護の世話にはならないと思っているせいか、その詳細を知る市民は呆れるほど少ない。生活保護が必要な状況に陥っても、自尊心や他人に迷惑をかけたくないという気持ちから制度の利用になかなか踏み切れない。しかも申請を受理する側の国が社会保障費の削減を目論んでいるため、困窮者に対して積極的な働きかけをしないので、余計に制度の理解が深まらない。

だから却下された案件が、ちょっとしたアドバイスで一転受理されることままたまある。また、そういう事例を多く見聞きした小日向はノウハウの貯蔵庫でもあった。

ただしどれだけ小日向がノウハウを駆使しても、申請者自身が理解しなければ話にならない。説明を聞いても要領を得ない様子人間ばかりだったので、最後には小日向が申請書のひな形を作成する羽目になる。この辺りの経緯は、典江の時と同様だ。

「窓口担当者、特に生活保護申請の多い役所では、窓口担当者が筆跡まで確認します。ひな形をそのまま提出せず、必ず自筆にして申請してください」

「担当者が日毎あるいは週毎に交代する窓口もあります。一度却下されたら、次は違う担当者に提出するのもいい方法です」

区役所と違い上司の監視もなければ時間制限もないので、相談者一人一人に懇切丁寧な説明をする。自ずと時間を費やし、気がつい

た頃には開始してから三時間が経過していた。

ところが三時間かけて捌けたのはたったの六人だった。順番待ちの列を眺めれば未だ最後尾の姿が見えない。

「すみません。ちよつとだけ休憩いただきます」

相談事務を傍観していた久ジイに断りを入れ、机の上のペットボトルに手を伸ばす。

「わしにいちいち断らんでもええ」

言われる通りだが、一挙手一投足を監視されているような気分なので、つい報告するかたちになる。長年のうちに培われた指示待ちの癖が抜けずにいると思うと、ひどく恥ずかしかった。

三時間ほぼ喋りっぱなしで喉がからからに渴いている。ペットボトルのミネラルウォーターを流し込むと、ようやく喉の粘膜が湿り気を取り戻した。

「よく声が続くもんだな」

説明の内容ではなく、久ジイは体力を褒めてきた。

「まるで喋る機械だ」

「丁寧に説明しているつもりなんですけど」

「機械だって丁寧に喋る。録音さえすればどれだけでも詳しく説明できる」

「僕は機械以下ですか」

「機械なら三時間で潰れやせんだろう」

久ジイは意外に毒舌で、忌々しいことに観察眼も優れていた。これまで相談を終えた六人は誰一人として満足した顔を見せなかった。ノウハウも教え、ひな形の作成までしても、問題は解決しないと思われていたのだ。

「詮無せんない文句だが、あんたの説明は役人の責任逃れみたいに聞こえる。助言さえすればそれで済むというようにな」

「僕の立場では助言くらいしかできません」

「できることをできる範囲で、か。確かに着実で誠実に見えなくもないが、言い換えりやできることしかせんという訳だ」

「それじゃあ足りないっていうんですか」

「目的による。苦界にいる者を本当に救いたいのか、それとも己おのれの誠意を示して罪悪感から逃れたいだけなのか」

「どうして僕が罪悪感を持つてなきやいけないんですか」

久ジイは束の間、小日向の目を覗き込む。重そうな目蓋まぶたの奥では、全てを見透みすかしたような瞳が光っている。

「誠意を尽くそうとする人間には二種類あってな。一つは他人のために尽くそうという人間、もう一つは己のために尽くそうとする者だ。見分け方は簡単でな。他人に尽くす者は限界を作らん。己に尽くす者はその逆だ。己のためにする行いだから、力及ばない時の言

い訳がいくらでも出てくる」

言い返そうとしたが、言葉が見つからない。昼間の余勢を買って提案したのは、徑子の件で抱いた罪悪感を払拭ふっしょくしたかったからに他ならない。加えてここで久ジイに恩を売り、己の存在意義を示したい欲もあった。

「人間の手というのは存外に小さいものでな」

久ジイは自分の手の平を差し出してみせる。

「それぞれに持てる分量というのは限られとる。何かを握るためには他の何かを捨てにゃならん。それで小日向くんよ。あんたはこの連中の信頼を勝ち取るために、何を捨てるつもりだったのかね」

小日向は再び言葉を失う。知識を披瀝ひれきするなどと偉そうにしても、実際は何も失くさずに共有しているだけだ。犠牲や喪失そうしつとは程遠い。

久ジイの言葉は正鵠せいこくを射ている。

浮かれ気分をへし折られていると、最近覚えたばかりの声が間に入ってきた。

「それはちよつと厳しすぎやしませんか」

間宮は遠慮がちに割り込んでくる。

「ほほう、まさか間宮先生から叱られるとはな」

「まさか叱るだなんて。ただ、他人の行為にあまり精神性を求めても意味ないじゃないですか」

「そうかね。善意というのは、読んだ字のごとく善なる意思があつてのものだと思うが」

「そんなことを言われたら、わたしの立場はどうなるんですか。医者だって生活がかかっていますからね。医は仁術じんじゆつとか言われますが、それだけじゃ食っていけない。人助けだけじゃ生きていけない。嫌な言い方になりますが、警官や弁護士や葬儀屋と同じく人の不幸で飯を食っている商売ですよ」

際きわどいことをさらりと云つてのける。言葉の端々から理知が聞き取れるので、決して即物的な物言いにならないのは間宮の人徳うんぬんというべきか。

「第一、サービスを受ける側に小日向くんの善意うんぬん云々は関係ないでしょう。やらぬ善よりやる偽善ですよ」

「一理も二理もあるな。だから間宮先生には気が抜けん」
久ジイはいささかも動じていないようだった。その証拠にきつちり言葉を返してみせる。

「しかし間宮先生。あんたがここの連中を熱心に診察してくれておるのは偽善なのかね。ほぼ週に一度の往診に薬品の手配、そういうのを全て無料で続けている。お蔭で自分とこころの診療所の患者さえ捌ききれんというのに」

「……ウチの台所事情をお話しした覚えはありませんよ」

「その気忙きせわしそうな顔を見ておったら、訊かずとも分かるさ。こんな風に濁にごっちゃいるが、年寄りの目を馬鹿にしてはいかんよ」

久ジイは面白がるように片手をひらひらと振ってみせる。小日向は〈亀の甲より年の功〉などという古い格言を思い出す。久ジイが皆から頼られているのもむべなるかなと思わされる。

「間宮先生の言う通り、人の得は行動で示される。さすれば小日向くんの仕事は称賛に値するものなんだろう。いや、これはわしが軽率だった。悪かったね、小日向くんよ」

「いえ」

頭を下げられても、言われたことは間違いないので素直に頷うなけない。

「ともかく三時間喋りつばなしで口も頭も疲れただろう。並んでい
る者にはわしから言っておくから休んどきなさい」

久ジイの声は構内によく響くので改めて指示を出すまでもなかった。並んでいた相談希望者たちは文句の一つも言わず、三々五々と散っていく。自分の力のなさを思い知らされる光景なのにほっとしてしまふ。それが更に情けなさを募つらせる。

「あまり深く考えないことだ」

こちらの思いを知ってか知らずか、間宮は労ねざらうように小日向の肩を叩く。

「閉じたコミュニケーションはどうしたって閉鎖的になる。〈特別市民〉の称号を与えられてもすんなり受け容れられるのは難しい」

「でも久ジイからあんな風に言われるとは思いませんでした」

「久ジイだって悪気があつての発言じゃない。大事な住民の個人情報に接触させる仕事だから慎重になっている。あの苦言は慎重さの反動みたいなものだ」

「そう、でしょうか」

「君が〈エキスプローラー〉に胡散臭さを抱いているなら、彼らも君を怪しく思っている。打ち解けるにはそれなりに時間を要するよ」
「受け容れられるためとかじゃなくて、本気で皆さんの役に立ちたかったんですけどね」

「よく分かるよ。君はあまり器用じゃなさそうだな。善人そうだし、世渡りも上手くないだろう」

「褒めてるんですか、^{けな}貶してるんですか」

「褒めても貶してもいない。見た目の印象をそのまま伝えているだけだ。もちろん間違いだとか抗議されたら修正するに^{やむを得ない}吝かではないがね」

「別に、間違いじゃありません。同じことを同僚からも言われてます」

「結構なことじゃないか。世渡りが上手なヤツより下手なヤツの方

が好かれる。ここの連中も世渡り下手だから、そのうちウマが合うようになるさ。現に、もう何人かとは家族状況や資産状況まで訊き出したんだろ」

「ええ、必要事項ですから」

「自身の事情を打ち明けた相手には警戒心を緩めるものだ。さつき三十人近くは並んでいたか？ 彼らからその必要事項を聴取した時点で三十人も気の置けない友人が誕生する。結果的には万々歳じやないか」

そう言って間宮は笑い掛ける。

話している途中で、小日向はふと思いついた。今なら心に引っ掛かっている疑問が氷解するのではないか。

「ずっと考えていたことがあるんです」

「どうしたら一般市民に格上げしてもらえるのか、かね」

「いえ、それはもう無理なことは分かっているので。僕が考えていたのは皆さんの出身地のことです」

間宮の笑顔が固まる。

「最初の相談者だった霜月さんは福井県敦賀市つるがでした。そしてさつき話を聞いた六人も、住民票の住所地は敦賀市八ヶ部町やつか べちようです。それだけじゃありません。地下で知り合ったのは遠城香澄さん、久ジイこと平尾久平さん、永沢透さん。区役所の空き時間に調べてみまし

た。するとですね、遠城も平尾も永沢も全部敦賀市八ヶ部によくある苗字なんですよ」

知った時には愕然がくぜんとした。偶然の一致という解釈もあったが、これだけの事例が重なればもはや偶然とは言わない。

「（エクスプローラー）の皆さんは敦賀市八ヶ部町の出身なのではないかと当たりをつけました。八ヶ部町と聞けばどうしても思い出してしまふ事件があります。遡さかのぼること今から五年前、八ヶ部町の高速増殖炉で発生した臨界事故です」

黙って聞いている間宮の表情はいよいよ険しくなってくる。

日本政府が延べ一兆円以上を注ぎ込んで開発した、敦賀市八ヶ部町の高速増殖炉。順調に稼働かどうし続ければ、核燃料サイクルを完成させる重要施設と位置付けされていた。

ところがこの増殖炉は順調どころか度々トラブルに見舞われた。放射性ガスの検知器誤作動に非常用ディーゼル発電機の故障、更には冷却用の金属ナトリウム漏れとそれに伴う小規模な火災事故を何度か発生させた。それだけではない。炉内中継装置の落下事故の際には死人すら出したのだ。

度重たびかさなる事故にも拘かかわらず高速増殖炉の開発・運転が継続されたのは、兎とにも角かくにも核燃料サイクルの完成が国家的事業だったからに他ならない。事故が発生する度に原子力規制委員会が立ち入り・

保安検査をし、運転再開となるのは、もはやルーチンのようだった。

こうして施設としては事故続き、施策としては失敗続きではあったが、国の後ろ盾のお蔭で何とか命脈を保っていた高速増殖炉の息の根を止めたのが五年前の致命的な事故だった。核燃料加工中にウラン溶液が臨界点に達し核分裂連鎖反応が発生、それに伴って溶液の入っていた沈殿槽ちんでんそうに亀裂きれつが生じ、中のウラン溶液が大量に漏れ出した。

核分裂連鎖反応の発生した時点で、溶液および沈殿槽は剥き出しの原子炉と同じ状態となる。中性子線は棟内のみならず施設外にも放出され、しかも退避の警報が遅れたために周辺住民の何十人かが汚染された。

棟内で働いていた作業員二百十二人が急逝きゆうせい被曝ひばくとなり、うち十五名が搬送先の病院で死亡した。国内では初の被曝死亡者を出したことで政府および文部科学省は遂に運転の続行を諦め、件の高速増殖炉は廃炉が決定される――。

「あの事故で不可思議だったのは被害者を巡る一連の報道と関わっています。発生直後から現場への立ち入りが規制され、被害者の実名は死亡した作業員以外は一切公表されませんでした。一部マスクミが被曝したと思わしき周辺住民に取材を試みようとしたが、その全員が転出していました。ひよっとして、その転出した八ヶ部

町の住民たちが〈エクスプローラー〉じゃないんですか」

小日向の推理には何の根拠もない。ただ既成事実を重ねただけの作り話に過ぎない。だから間宮が一笑に付せば、それで終わりにするつもりだった。

だが間宮は笑うどころか、目の前の小日向を今にも絞め殺しそうなほど凶悪な顔つきになっている。

「さつき世渡りが上手なヤツより下手なヤツの方が好かれると言った」

「ええ、聞きました」

「付け加えておく。勘の鋭いヤツより鈍いヤツの方が好かれる。勘が鈍けりゃ要らぬトラブルも引き起こさないからな」

「トラブルだなんて、そんな」

「大抵のトラブルは起こそうとして起きるんじゃない。起きてしまうものだ。きっと久ジイはその辺を危惧して、君を〈特別市民〉にしたんだろう」

「どうしてですか」

「〈エクスプローラー〉の存在を知られたからといって、まさか殺す訳にもいかない。かといってただ解放したんじや、外部に秘密が洩れる。だが身内に取り込んでしまえば善人そうだからそうそう裏切ることもない。君を〈特別市民〉にしたのも、おそらくそれが一番

の理由だ。いかにも久ジイらしいやり口だね」

「じゃあ僕の推論は」

「当たっているよ。ついでに訊くが、ここの住人たちが昼間は地下に居住している理由にも見当がついているのか」

「それはその、被曝者だから隔離かくりしているとか……」

一転、間宮は非難するような目で小日向を睨にらむ。

「馬鹿を言っちゃあいけない。被曝が伝染なんかするものか」

「でも、八ヶ部町で被曝したと思おぼしき住民は転出していないじゃないですか」

「放射能に汚染された村では農業が立ち行かなくなったし風評被害もある。近隣県や都内への移転は、政府による補償の一部だよ」

「でもですよ。地下に幽閉状態で、定期的に間宮先生の往診があるなんて、まるでどこかのサナトリウムみたいじゃないですか。それってやっぱり被曝した八ヶ部町の住民たちと一般市民との接触を怖れているからじゃないんですか」

「勘が鋭い癖に思考回路は結構お粗末なんだな」

吐き捨てるような口調に変わった。

「その上に善人ときているから余計始末が悪い。世の中に蔓延はびこるデマやフェイクニュースは、君のように浅はかな善人が広めるものだと相場が決まっている」

あんまりな言い草だったが、折角間宮の口が開いたので抗議は我慢することにした。

「せめて納得させてください」

「疑問を疑問として放っておける人間じゃなさそうだし、妙な誤解をされたままじゃ今後に差し支える、か」

間宮はしばらく考え込んでいたが、やがて小さく嘆息すると小日向に向き直った。

「どのみち君も公務員にあるまじき違法行為で弱味を握られている。軽々に彼らのことを口外はするまい。そうだな？」

「もちろんです」

「これはわたしの独断で話すことだ。従って万が一にでも地上の誰かに洩らしたりでもしたら、決して君を許さない。その覚悟はあるか」

許さない間宮がどんなペナルティを科すのか見当もつかないが、

小日向は敢えて逆らわない。

「彼らが日中は地下で暮らしているのは、確かに八ヶ部町での被曝が原因だ」

「やっぱり」

「ただし君の言うように伝染云々の目的で隔離されているんじゃない。彼らを蝕んでいるのは色素性乾皮症だ」

聞き慣れない病名だった。間宮の説明によれば概要は次の通りだ。

ヒトの皮膚は紫外線が当たると細胞内の遺伝子が損傷を受ける。

その損傷を修復するため遺伝子の中には不定期遺伝子合成いんしといい、ヌクレオチド除去修復に必要なタンパク質を生成する因子が含まれているが、中にはこの因子に異常があり遺伝子の損傷を修復できない者も存在する。紫外線による損傷が修復できないと露光部ろこうぶの皮膚にシミが生じ、乾燥し、やがて皮膚がんを発症する。これが色素性乾皮症だ。同病による皮膚がんの発症率は健常者の約二千倍、また皮膚がん以外のがんの発症率も約二十倍と言われている。

更に皮膚がんだけではない。進行すれば運動機能の低下、知的障害といった神経症状を招く事例さえある。

「色素性乾皮症は日本の場合、人口二万二千人に一人の割合で発症する遺伝病だ。それも両親二人ともが保因者であつても子供に遺伝する確率は四分の一だから、かなり珍しい病気とっていい。ところがウラン溶液洩れの事故で被曝した住民の実に半数以上が色素性乾皮症を発症した。本来なら遺伝子異常に由来する病気が、どうして八ヶ部町住民に発症したのか。考えられる原因は急性被曝しかない。因果関係が立証できないとして政府と御用学者どもは否定したがね」

「治療法はないんですか」

「ないね」

間宮は力なく首を振ってみせる。

「元々が遺伝性の病気だから国の指定難病になっている。動物実験では原因遺伝子を外から注入して遺伝子の修復能力を改善する試みが為なされているが、ヒトではまだ試されていない。がんのできてしまった皮膚を切除して別の皮膚を植皮しても所詮は対症療法に過ぎないし、神経症状についてはそもそも発症システムが研究途中にあるから治療法も見つかっていない。発症者と保因者にできることといえば、確実に遮光しゃこうするくらいだ」

それで日中は日光の届かない地下に暮らしているのか。

「被災地から移転したものの日中、外に出ることはできない。地方では深夜勤務の口も少ない」

「だから地下の廃駅が現存している東京に再移転したんですね」

「再移転といっても正式な住所にはならない。郵便を配達してくれる訳でもないからね。だから住民票の住所地は従来のままにして、陽が沈んだら手荷物を運んだりしている。わたしが定期的に往診しているのは罹患者りかんと保因者の症状をチェックするためだ」

「先生も八ヶ部町にお住まいだったんですか」

「事故現場からは離れていたがね。八ヶ部町の住民が地下に住まうと聞いた時、彼らの主治医になれるのは自分しかないだろうと思

った。実際そうだったし、(エクスプローラー)の事情に詳しく秘密も守れるという点でも、わたしは適任者だった」

適任者という単語に妙な違和感を覚えた。

「地下への再移転は政府の指示だったんですか」

間宮は質問の真意を探るかのように、いったん黙り込む。

「どんなに無責任な政府でも、被曝者の一斉移転となれば気づかないはずはないでしょうし、また政府の許認可なしに廃駅を利用することも叶わなかったはずです」

「鈍いと思ったのに、許認可の点に注目するとは公務員の性さがなのか。この国は被害者をそれほど厚遇してくれない。原因が国家的プロジェクトの失敗によるものなら尚更だ」

「この広い空間を好きに使用しているのは全くの無許可だということですか」

「そうは言っていない。ただわたしたちの提案に協力してくれる者がいるというだけだ」

また協力者か。

以前、永沢がうっかり口を滑らせた際もその名が出た。いったい協力者というのは何者なのだろうか。更に問い質ちそうとした時、闖ちん入にゅうしや者の声に遮さえぎられた。

「あんなの協力者でも何でもないよ」

声の主は香澄だった。

4

「同情とか正義感からじゃない。あれって、どう考えても罪滅ぼし程度じゃん」

香澄の尖った物言いに、間宮は当惑しているようだった。

「被害者の立場からは、そういう見方になるのも仕方ないだろう。しかし相手の善意が本物かどうかなんてどうでもいいことだ。要は香澄ちゃんたちへエクスプローラーに恩恵がもたらされるのなら、それでいいんじゃないのか」

「そういうオトナな見方ができないコなので。あ、先生。久ジイが呼んでたよ。富士代ふじよさんの具合がよくなさそうだって」

「急患か」

途端に目の色が変わったのは職業柄というべきだろう。間宮は目礼もくれいも交わさぬまま、そそくさとその場を立ち去ってしまった。

「変なところで律義なんだから、あの先生」

香澄は拗すねたように、間宮の去った方に顔を向ける。

「途中から聞いてたけどさ、あたしたちの病気のこと教えちゃったんでしょ。患者の個人情報を守る気あんのかしら」

「個人情報っていうより、被曝者団体の主張みたいなものだろう。医師の守秘義務としては許容範囲だと思うけど。第一、香澄ちゃんたちとこれからも付き合い続けてたら、遅かれ早かれ知れることだ」

「へえ、長く付き合うつもりだったんだ」

「何しろ、こっちは弱味を握られている。脅迫されている側として、不本意ながら長く付き合っていかなきゃならない」

「まー、あたしも夏にこんなもの着てなきゃならない理由を隠さなくて済むか」

そう言って、長袖の端を引っ張ってみせる。いかに地下生活とはいえ、夏でも肌を露出しない服を着ているのには深刻な理由があったのだと思い知る。

「事情を知るまではファッションだと思ってた」

「へへー、JKの肌が見たかったか」

「そんなんじゃない」

「小日向さんになら見せてやってもいいよー」

香澄は左の袖を肩近くまで捲ってみせた。いきなりだったので、小日向は目を逸らすのも忘れてしまった。

視線が彼女の肌に釘づけになる。

二の腕には植皮の痕が鮮やかに浮かんでいた。

「ねー、エロどころかグロでしょー。こんな痕がね、まだ五つもあ

るのよ。だから、どんなに汗掻いても、どんなにダサくても夏も長袖」

快活な口調だが、どこか自棄気味にも聞こえる。

「お蔭でさ、コンビニとかいくと他の客とか店員とか変な目で見るよね。こいつタトゥーしてるんだろって。ふん、タトゥーだったら大威張りで見せびらかすよね」

小日向は幸いにも植皮手術を経験したことがないので、術後の疼きや痛みには関心を持ったことさえない。

しかし至近距離で目の当たりにすると、植皮痕の禍々しさからどうしても想像を逞しくしてしまう。

「あ。その、同情するような目はやめてよね」

見透かされたように言われ、小日向はどぎまぎする。

「まー、事故を起こした人たちはそんな同情さえしてくれなかったんだけどさ」

八ヶ部町で事故が起きた際、核燃料加工施設を管理していた民間の会社に非難が集中した。しかし事故の早急な幕引きを図ったのは経産省だった。香澄が詰っているのは、どちらに対してなのだろうか。

「ここにいる人たちの公務員嫌いは、それが理由なのか」

「公務員って一般市民のために働いているかと思っただけで、そう

じゃなかった。あの人たちって省の利益のために働いているよね」
「あの人たちっていうことは、その中に僕は含まれていないのか」
「あたしたちのために汗を掻こうとしてるみたいだから、取りあえず除外。今だから言うけど小日向さんが生活保護の窓口業務だと知られてから、みんなの評判はよくなかったよ。もう小日向さんがどうとかじゃなくて、お役所とか公務員さんにはホント嫌な思いをさせ続けたから」

「被曝の実態を隠蔽いんぺいしたからか」

「それもあるんだけどさ」

香澄は努めて軽い口調にしようとしているようだが、無理をしているのは小日向にも分かる。

不意に、香澄が今まで両親の話題には一切触れなかったことを思い出した。

両親ともども（エクスプローラー）なのか、それとも香澄一人が暮らしているのか、そもそも両親は健在なのかどうか。

ねえ、と香澄が話し掛けてきた。

「何か手伝えること、ない？」

「急に優しくなった」

「優しいとか冷たいとかじゃなくて、あたしたちのためにしてくれてることなら手伝うのが当然でしょうが。久ジイに聞いたら三時

間喋りっぱなしだったっていうじゃない」

「だから今、休憩時間もらっているんだけどね」

「二人でやったら、もつと休めるんだよ」

君に手伝える仕事じゃない——そう告げるのは容易たやすいが、口に出したが最後、折角縮まりかけた香澄との間が遠のいてしまう怖れがあった。

しかし、口に出す必要はなかった。

「……やっぱ、あたしじゃ役に立たないか」

香澄に見え透いた嘘は通用するまい。小日向が黙っていると、香澄は机の上に座って足をぶらぶらと振り始めた。

「だよー。ここにも教えてくれる先生がいるけど、ちゃんと学校に通っている訳じゃないし」

「いつから通っていないんだ。八ヶ部町の事故が起きてからか」

「うーん、日中は表に出られないのが分かっているから。言っとくけど、成績は悪くなかったんだから」

むきになるところが少し可愛かった。

「うん。それは何となく分かる」

「本当なら今だって部活動とかき、健全なJKらしいことしてるはずなんだよね。高速増殖炉だか何だか知らないけど……チツクシ

ヨウ」

吐き捨てるように言ってから、しばらく香澄は黙り込む。

訊きたいことは山ほどあるが、どれも香澄の過去を知りたいという個人的な好奇心からくるものだ。口に出せば、これもまた彼女との距離を遠くするに決まっている。

あつと思った。

いつの間にか自分は香澄に近づきたいと願っている。仕事以外は鉄道にしか興味を持たなかった男が、今は目の前で所在なげにしている女の子のどうでもいいことを知りたいと思い始めている。

「(エクスプローラー)に香澄ちゃんと同年くらいの子はいないのか」

「いるし、時々と一緒に買い出しとか行くよ。でもさ、向こうが気を遣ってるのが丸分かりなんだよね。あたし、ふた親ともいないし」

香澄は小日向の反応を確かめるように、こちらを見る。

「小日向さんのお父さんとお母さんは元気なんだってね」

「久ジイ情報か。僕に関しては個人情報抜けなんだな」

「そりゃあ怪しい侵入者なんだもの。個人情報抜けけというより情報共有。だからかな。あのね、ふた親揃っている人は他人の家族構成なんてあまり気にしないの」

言い換えれば、香澄本人は気にするという意味だ。

「本っ当、やな性格だよな」

「僕がかよ」

「あ・た・し・が。フツの家族を持つてる人とか、フツの暮らしをしている人を見てると、何だかイライラしてくる。イライラするのがよくないこと、知っているけど抑えられない」

「自覚している分、マジだと思っけど」

「自覚しててもヤなもののはヤなの。ついでに、知り合って間もない人にヤなところ見せるのもヤなの」

「違っと思っ」

香澄がゆっくりとこちらを向く。小日向は言葉を選びながら話し出す。

「自分の弱いところ醜いところを曝さらけ出せるのは強い人間だ。それだけでも大したものだよ」

「……マジで？」

「世の中で、どれだけのオタクが自分の趣味を隠していると思っ」

小日向は全世界の仲間に向かって両手を合わせる。許せ。今はこ
うでも言わないと彼女が可哀想なんだ。

香澄は訴えるような視線を寄せす。

「そんなこと言うのなら、責任取ってよ」

「どんな責任さ」

「ヤな話を聞いた後でも、変わらずあたしをソんケーすること」

やがて彼女が打ち明けた話は、こんな内容だった。

五年前のちょうど今頃、香澄は夏休みの宿題に追われていた。残された休みはあと二日しかないというのに、まだ宿題は半分しか進んでいなかったのだ。

家の中は香澄一人だった。母親はどうに他界しており、父親の貴文たかふみは作業員として高速増殖炉で働いている。まだ小学生の香澄には原子力が何であるかは分かっていない。ただ父親が誇りにしている仕事であり、原子力施設があるお蔭で八ヶ部町が潤うるおっている事実だけは知っていた。原子力施設が危険であるはずがない。何しろ自宅から五百メートルも離れていない場所に施設が建っているのだから。

午前十一時半を過ぎた頃、俄にわかに外が騒がしくなった。表に出てみると、施設に向かう道路を数台の救急車が走り抜けていく。ばりばりという爆音に見上げれば、ヘリコプターが頭上を通り過ぎようとしていた。

次いで街頭に設えられたスピーカーから町の広報が流れた。『こちらは八ヶ部町役場です。原子力施設で事故が発生しています。住民の方は落ち着いて避難指示に従ってください。屋形地区やかたの方は直ちに八ヶ部小学校に避難してください。富岡地区とみわがの方は屋内に退避して、外出は控えてください。繰り返しします。こちらは八ヶ部町

役場です』

落ち着いてと話す割に、スピーカーから流れる声は上擦うわすっていた。

香澄は後になって知ることになるが、この時施設の所長は文部科学省と八ヶ部町に事故の第一報を伝えていた。出動した救急車は、文部科学省の要請を受けて施設内で被曝した作業員を搬送するためのものであった。一方、国は第一報から一時間を経過しても周辺住民への対応に着手できず、退避の広報は八ヶ部町町長の独断で行われた。結果的には、この独断が功を奏した。もし国の判断を待っていたら被曝者は更に増えたであろうことが容易に予測できたからだ。

子供ながら、香澄にも原子力施設が大変な事態にあると理解できた。だが、さすがに自分の父親が救急搬送される作業員の一人であるとは想像が及ばなかった。

いったん小学校に避難した香澄は、ほどなくして父親の入院を知らされる。

「すぐ病院で手当てを受けたんだもの。きっと大丈夫よ」

近所に住む霜月径子はそう言って慰めてくれたが、貴文を巡る状況は最悪だった。沈殿槽の近くで作業をしていた貴文が被曝した放射線量は実に二〇シーベルトを超え、高線量被曝による染色体破壊で新しい細胞の生成が不可能な状態になっていたのだ。

貴文にとって不運だったのは、日本における被曝事故はこれが最

初だったことだ。医療チームには症例の蓄積も確実な治療法もなく、毎日のように発現する新しい症状に困惑しながらの治療となった。

白血球が生成されなくなり、造血幹細胞の移植を行うものの、新細胞の染色体にも異常が発見される。医療チームが懸命に治療を施す中、貴文の肉体は心停止と救命処置による蘇生を繰り返す。だが心肺停止によるダメージは各臓器の機能を低下させ、遂に事故から六十日目、貴文は多臓器不全で還らぬ人となった。

父親の死を知らされても、香澄には少しも実感が湧かなかった。病院に搬送されても面会謝絶で、一度も貴文の顔を見られなかったせいもあるが、とにかく現実味が感じられなかったのだ。

だが香澄は、現実味を己の肉体を介して味わうことになる。隣町に移転し、父親の一周忌を過ぎようとする頃、身体の変調に気づいたのだ。

たったの数分外出しただけで肌の露出部分が激しく日焼けした。顔も真っ赤に腫れ上がるようになった。翌日になっても腫れは引かず、それどころか水ぶくれを生じた。とにかく日光に晒した部分がじわじわと焼かれるように痛む。痛みで眠れない夜が何日も続いた。

季節は既に冬を迎えようとしていた。日中の陽射しは儂いほどに淡く、弱い。夏の強い陽射しとは比べものにならないはずなのに、

これほど火傷の症状が現れるのは到底尋常ではない。

同じ八ヶ部町で診療所を開業していた間宮医師は、香澄を診察するなり色素性乾皮症と判断を下した。

「もう、君は太陽に肌を晒すことはできない。皮膚がんになりたくなければ完全な遮光を心掛ける以外にない」

いきなりの宣告に、今まで意識の底に眠っていた感情が爆発した。

「これって事故のせいなんですか」

問われた間宮は即答しなかった。その間の沈黙が香澄に本心を知らしめた。

父親を殺し、今また自分の肉体を蝕^{むしば}もうとする放射線。間宮に問い質すと、あの日事故現場から五百メートル範囲にいた村民の多くに香澄と同様の症状が現れているという。

父親を殺した犯人が分かっても手出しできない。自分の人生から太陽を奪った張本人がいるのに、一切詫^わびも償^{つぐな}いもしてくれない。

間宮の目前で、香澄は絶叫しながら泣いた。何故、選^よりにも選^よってこんな理不尽が自分たち父娘に降りかかるのかと天を呪った。

原子力を呪った。

国を呪った。

関係する省庁と、そこに勤める職員全員を呪った。

国は自分たちを護ってくれない。むしろ迫害し滅ぼそうとしている——間宮から再移転を勧められたのは、そんな風に世界を憎悪し

ている最中だった。

「日中でも太陽光線を免れて生活できる場所を見つけた。被曝した住民全員を収容できる広大な場所だ。少なくとも、そこなら病状が進むことはない。症状を抑えながら治療法を探すことが可能だ」

その頃には何度か植皮手術を繰り返し、香澄の身体はパッチワークのようになっていた。今の環境に住み続けても状況が好転しないのは火を見るより明らかだった。

結局、間宮に押し切られるかたちで香澄は再移転を承諾する。初めての都会、眩く煌めくネオンの海と見上げる高層ビルの山脈。望むものは何でも揃っていた。

ただ一つ、太陽を除いては。

「最初は新天地だと思ってたんだ」

過去を語り終えた香澄は眩くように言う。

「でも、しばらくしてからみんなが気づいた。確かに陽射しを受けないから皮膚は護れるし病気も進行しない。でも、その代わりに普通の生活を奪われている。夜と雨の日にしか地上に出られない、まるで吸血鬼みたいな生活。そんな生活を望んだ訳じゃないのに、他に選択肢がないから従わなきゃいけない。八ヶ部町の人間が、どんな悪いことをしたっていうのよ。どうしてあたしたちだけが、そん

な罰ゲーム受けなきやいけないのよ」

香澄の力ない訴えが構内にこだまする。

小日向は何も言えずにいた。

くくくく